

特集

東アジアのネットワークと 日本の近世

責任編集 安保 博史

『東アジア比較文化研究』第十九号は、「東アジアのネットワークと日本の近世」と題する特集を設定した。本特集は、日本の近世期が、日本・中国・朝鮮・琉球などの間で、様々な文化接触が行われ、影響関係が複雑に絡み合い、東アジアに広範なネットワークが存在していたことに注目して「日本の近世」の文化・文学・思想を検証する論考七編を収める。

東アジア比較文化国際会議創立二十周年を記念して日本支部が企画・編纂した論文集『東アジアの知——文化研究の軌跡と展望——』（新典社・二〇一七年）において、編者の中西進氏は、「巻頭言——学会の過去と未来の夢」の中で、「日本はユーラシア大陸の外にある、海洋国」であり、「国の区域を外して東アジアを地域と考え、文化上関係する広域アジアを枠ぐみとした研究」、「海のアジア」も視野に入れた研究の必要性を唱えられた。この視点は、「日本近世は、アジアの海の激しい流動の中ではじまった」（はじめに）の一文のもと、「アジアの中の江戸」の視点から十八世紀の江戸の表現媒体の諸相に照射を加えた『江戸の想像力——18世紀のメディアと表徴』（筑摩書房・一九八六年）を編まれた田中優子氏が、刊行当時から抱懐していたとされる「アジアの海の

中の江戸」というイメージ(田中優子氏「アジア学としての近世」〈至文堂「國文學」第44巻第2号・一九九九年二月、特集「ジャンルを横断する 近世文学の新局面」所収)と照応し、興味深い。本特集「東アジアのネットワークと日本の近世」のコンセプトの淵源は、右の「海のアジア」や「アジアの中の江戸」にあり、両氏のご高見に感謝の念を呈したい。

ところで、歴史学の分野では、二〇〇〇年代初頭から、外交史や対外交渉史や経済史は勿論、思想・宗教・文芸・芸術・科学技術なども含めた、種々の大規模な東アジア海域交流史研究の共同研究プロジェクトが展開し、日本文化の探求とその再考や再検討が活発化している(伊藤貴之氏「日本における東アジア海域交流史研究の現状と動向」(山田奨治氏・郭南燕氏編『江南文化と日本 資料・人的交流の再発掘 上海シンポジウム2001』〈国際日本文化研究センター・二〇〇二年〉)。近世文学の分野でも、夙に染谷智幸氏が、右の歴史学の研究動向と歩調を合わせる如く『西鶴小説論―対照的構造と(東アジア)への視界』(翰林書房・二〇〇五年)、『冒険 淫風 怪異―東アジア古典小説の世界』(笠間

書院・二〇一二年)などを上梓し、近世初期文学を東アジア海洋域文化の総体から捉え直す営為を続け、二〇一一年九月の日本近世文学会高麗大学大会の「日本近世文学会と朝鮮」シンポジウムを司会・コーディネーターとして成功に導き、日韓比較文学研究の新たな胎動を促した事実は、日中韓の研究者で構成される本学会の会員諸氏からも注目されることになった。近年は、森田雅也氏が、「鎖国下日本と世界に繋がる海の交易ルート―西鶴文学を視座として―」(関西学院大学人文学会『人文論究』第六十七巻第四号・二〇一八年二月)を発表し、十七世紀の日本の河川流域圏ネットワークと海運・交易ルートから西鶴文学の事績の意味に迫るなど、研究史上、染谷氏とともに伴走する体であり、頼もしい限りである。なお、会員外ながらも、右の染谷氏・森田氏から特段のご理解・高配を賜り、本特集に玉稿をお寄せいただいたことは望外の幸せである。厚くお礼申し上げます。

かくて、本特集は、東アジアのネットワークの視点から、浮世草子・読本・歌論・漢詩作法書・俳諧・絵入り百科事典などに照射を加え、日本文学・日本文化の「近世」の再検証を行ったが、この試みは、

日中韓三国の比較文化研究を推進する本学会の機関誌の特集に相応しいものと言える。ご多用の中、ご寄稿くださった六名の先生方に対して深甚の謝意を表したい。

東アジアにおける南蛮黒船来航と外寇危機 —十六世紀から見る日本の近世文化形成—

森田 雅也

一、はじめに

大掴みながら、世界に国家という概念が形成されてより、自国が突然に外敵から侵略を受けるという「外寇」の恐怖は、常に懐抱していた艱苦ではなかつたらうか。ある意味、それが事件史として刻み込まれて世界歴史年表が形成されたとしても壮語ではあるまい。

日本の歴史において、江戸時代までの最大の外寇と言えば、元（蒙古）が、日本を侵略しようとした二回に及ぶ元寇（一二七四・一二八一年）であろう。これ以前にも、古代、朝鮮半島の新羅・百濟攻防に関係し、大陸からの侵略に備えて防人を備え、遷都を繰り返す時期があつたし、倭寇として小競り合いを繰り返す時期もあつたので、日本が島国国家である以上、開かれた海洋からの忽然たる外国船からの軍事侵略は常に想定すべきものであつたはずである。

ところが古代より、平和外交の時期も、緊張の時期においてさえも幻想ともいふべき海防理念があつた。平城京・平安京を王城とすれば、不測の外敵は西の海路より、九州・瀬戸内航路、狭い関門・明石海峡を経て、途中無数の島々を制圧しながら、内部奥深くの大阪湾まで辿り着かなくてはならない。さらに上陸して多くの抵抗を受けながら王都を陥落させることは不可能ではないか、いかな精強な外敵でもこのような消耗戦を企図

しないはずであろう。もちろん、外敵は西からとは限らない、南と東の世界に開かれた太平洋の海原からの侵略も想定されるが強力な潮流・黒潮によって阻まれる。北の日本海からの侵略は偏西風や複雑な潮流・寒流によって阻まれる。この理念はユーラシア大陸を席卷した強大な蒙古の襲来すら退けたのである。古代の帆船の技術力からすれば当然の分析であった。その幻想と現実と守られて島国日本の安寧は長く続いた。

しかし、十六世紀中頃、ポルトガル船が種子島に漂着し、鉄砲が伝来し、宣教師たちが続々来日するが、彼らは短期間で容易に日本の南の島嶼伝いに王都・京都へと向かった。いわば、いともたやすく西欧の人々が「幻想の海防理念」の夢を打ち砕いたと言える。

彼らの多くは見事な大型帆船でやってきた。十六世紀に日本に来航した西欧諸国の船体はタールなどで黒く塗装していたので、中国船や和船と区別するため、「黒船」と呼んでいた。俗称と言うより、一五八七年に、豊臣秀吉が下したキリスト教禁令の後段に「黒船」の語を記したのを初見とし、その後も対外関係記録文書にも多く用いられた正式な呼称である（注1）。

つまり、日本人が驚愕した「黒船」到来はアメリカのペリー来航を待つわけではないのである。もっとも後に定義する「南蛮人」たちの十六世紀の黒船は武力で強引に開港を迫ったわけではなく、交易とキリスト教の布教を目的として、友好的に東アジア諸国と接してこるわけであるが、その方法は大航海時代（十五世紀後半～十七世紀前半）に得意とした手法であった。次の段階は南米に見るように植民地支配となる。新航路を開発し、海外進出を果たそうとするポルトガルとスペインの覇権争いは、十六世紀前半にはポルトガルは大西洋から喜望峰を回航するアジア航路を確立し、インドに貿易航路を築いており、スペインは太平洋からマゼラン海峡を経てアジアに達する航路を確立し、フィリピンを植民地化していた。両雄が拮抗するのは日本を含む東アジア海域であった。アジア海域の盟主、明はようやく倭寇を平定したことから油断があったかもしれない。十六世紀中頃から、中国を含む東アジア海域にヨーロッパ諸国の貿易拠点が築かれていき、東アジアの海洋交易バランスを崩し、終焉に向かいつつあるヨーロッパの大航海時代の渦へと巻き込んでいく。

十七世紀には主役がスペイン・ポルトガルから徐々にイギリス・オランダへと代わっていくが、日本の対海

外交・外交政策においてもこの構図は変わらない。やがて、十八世紀にはロシア、十九世紀にはアメリカ、世界の列強国がアジアへと押し寄せてくるが、欧米の国家存亡の攻防はちょうど江戸時代と重なっており、島国日本はまた偶然「幻想の海防理念」に守られて明治時代に向かっていく。

以下、その中でも十六世紀から鎖国までの時代、どのように東アジア海域での交流が変化し、日本文化の形成に影響を与えたであろうか。以下、論じるものである。

二、十六世紀文化形成とキリスト教

十六世紀、日本へのキリスト教が「イエズス会」によって布教された意義は大きい。「イエズス会」は、イグナティウス・ロヨラを中心として、フランシスコ・ザビエルら同志七人によって創立された司祭修道会である。この会は十六世紀初頭に起こった宗教改革に対して、カトリック復興運動貫徹の第一線に立ち、一五四〇年教皇パウロ三世によって会の創立を認可されるとともに、布教・学問・教育の面で著しい活動を長く展開することとなった会派である。いわば、その高踏な精神をそのままに創始メンバーのフランシスコ・ザビエルが日本への布教に努めたわけであるから、その姿勢には仏教ならば高僧伝に加えられるべきものであった。「国史大辞典」(吉川弘文館)「イエズス会」の項には、

彼は日本が高度の政治的、社会的制度と、足利学校や比叡山のごときすぐれた学府をもち、日本人が知識旺盛なことを認め、その文化・風習・優れた特質を尊重し、これに順応する布教方針をとるべきことを規範とした。この方針は戦国乱世のさなかにあった彼の日本滞在中には必ずしも実現できなかったが、彼の宿願であった日本の中心京都の布教はのちにビレラやオルガンティーンによって果たされ、彼の布教方針はワリニアーノによって組織的に実現されて、日本人宣教師のみならず、日本の指導的人物の養成をめざした教育と学問、教理書・語学および文学書の刊行、絵画・音楽・活字印刷や銅版彫刻の技術など西欧学術文化の移植と日本の文化・風習の研究とに大きな業績をあげた。

とされている。日本の戦国乱世も十六世紀半にはなると群雄割拠から抜き出た有力武将同士の争いに絞られてくるが、彼らは領国経営にも優れた手腕を発揮する。鉄砲と火薬を手にし、田畑を踏み荒らしただけの印象であるが、近隣諸国を従え、後世に名を残した戦国大名の多くは、金銀などの鉱山開発を行い、交易による経済発展を遂げ、京都文化の自国への移植などを試みた。結果、十六世紀にそれらの一つ一つを服従させ、天下統一をなした織田信長、豊臣秀吉政権、いわゆる織豊時代になると、経済、文化、宗教、いづれをとつても西欧に比肩するほどの文明国日本になっていった。その発展の潤滑油となったのがイエズス会宣教師たちとイルマン（修道士）ロレンソ（一五二六―九一）であった。

出自不詳の琵琶法師が一九五一年、山口でフランシスコ・ザビエルと出会い、受洗、日本人キリシタン、ロレンソが誕生する。彼はザビエル離日後も、豊後・肥前で宣教師らに日本語を教えつつ布教。一五五九年にはヴィレラ宣教師に従い入洛。室町幕府十三代將軍足利義輝の許可を取り付け、京都・堺・大和に布教を開始するが、仏教徒松永弾正久秀と対立し、仏教とキリスト教の宗門論争の場が与えられる。そこで松永臣下でも仏教理論に詳しい高山飛騨守が心服。逆に高山飛騨守、右近親子はヴィレラ宣教師とロレンソによって入信する。所謂、キリシタン大名への布石である。高山親子は織田信長入洛により、松永久秀から和田惟政の支配下となり、高槻城主となるが、摂津を領する和田惟政は、京都、摂津でのキリスト教布教を保護し、信者は驚異的に増えていく。高槻領内二万五千人のうち、一万八千人が改宗したと宣教師側は伝えるが、実数に開きがあるにせよ、高槻にキリシタンの領地が出来上がったことは事実であろう。もちろん、イエズス会の宣教師たちも陸続き、畿内全体にもキリスト教信者が増え、九州には宣教の始めより大友宗麟を始め、キリシタン大名が増えていく。

ただ、織田信長はイエズス会宣教師オルガンティーノ（？―一六〇九）を重用し、摂津領主の荒木村重謀反時にその腹心である高槻城の高山右近、茨城城の中川清秀の両キリシタン大名に謀反を思い留めさせているが、セミナリヨ建設などキリスト教布教には庇護しながらも積極的ではなかった。信長の日常がキリシタンの信仰生活とはほど遠かったことは知られるところであるが、信長のキリスト教庇護は石山本願寺を中心とする

一向宗包囲網や古くからの比叡山、高野山などの畿内仏教勢力を排除するために用いた奇手であったと言えるであろう。最近の多くの研究者が指摘するように晩年に建設した安土城天守閣を見れば、儒仏神を超えた信長への個人崇拜を意図しており、たとえ、本能寺の変（一五八二）を生き延びたとしてもキリシタン王国は東アジアに誕生しなかったであろう。

また、キリシタン大名の多くも、高山親子のような敬虔な一部キリシタンを除いては、後の秀吉時代の棄教の躊躇いなきからは、信長への臣従の証にキリスト教を利用したとの不審も否めない。

それでは織田信長やキリシタン擁護の大名たちの興味はどこにあったかと言えば、黒船に乗ってやって来た人々が教えてくれた、地名としては既知でありながら、実態には未知である東南アジアの国々の存在と交易航路の存在である。

彼らに聞けば、日本は地球という球体の一部であり、日本の真裏にあたるヨーロッパには日本より数段優れた文化を有した国々の地域があり、巨万の富とともに栄えていると言うのである。しかも、そのヨーロッパの中でもスペインと隣国のポルトガルとがもつとも大帝国であり、いち早く海外進出を果たし、トルデシリヤス条約（一四九四）やサラゴサ条約（一五二九）などによって地球の陸と海を二分し、世界を支配しているなどと説明されても意味不明で、せいぜい、地球の海をポルトガル人は自国から西に廻って、スペイン人は東から廻って、島や大陸づたいに東南アジアの方から日本に來たとしか理解できなかったであろう。ましてや、スペイン帝国フェリペ二世がポルトガルの王位の継承を行っているなど何のこともか、異能の織田信長をしても想像できなかったであろう。そのため、彼らの国をイスパニア国とか「南蛮国」と呼んだ。

「南蛮」という語について松田毅一氏は、中国の『太平御覽』『南蛮』の項の「四夷」に「東夷西戎北狄南蛮」に発するとして、

我が国における「南蛮」の地域は、古くは薩南諸島とスマトラ、ジャワ等東南アジアの間を流動したこと
は明らかである。これ等の地域からの「南蛮人」なり「南蛮船」が薩摩、伊豆、豊後、三河、時に日本海
沿岸の若狭等に漂着したとあるのは、バシー海峡から北上し、九州で太平洋岸の本流と日本海沿岸の支流

に分かれる日本海流、所謂「黒潮」の関係によることは贅言を要しまい(注2)。

と古代からの日本の「南蛮」について定義されながら、十六世紀、ポルトガル船来日後は、甚だ不明確となり、ヨーロッパ人は、南方から来た唐、天竺以外の国人という点では「南蛮人」に違いなかったが、スペイン国王がポルトガル国王を兼ね、まだ統一国家でなかったイタリヤに多く領土を有していたため、宣教師達の国籍がまちまちで、ヨーロッパを知らぬ日本人には「南蛮」の実体を把握することは困難であったと説明されている。さらに松田氏は奈良興福寺の多門院の日記に「キリシタン国」は「南蛮」という記事があることや、フランシスコ派の宣教師が「日本人は全ヨーロッパのことを南蛮と称する」と述べていたことをあげられた上に十七世紀中頃のオランダのインド総督までが江戸幕府にあてた書状で南蛮人を南ヨーロッパのカトリック教国民の意味で用いていたという記述などを報告されている(注3)。したがって、十六世紀に黒船で訪れていたヨーロッパ人を日本人は皆「南蛮人」と呼んでいたことになる。

三、南蛮貿易から東アジア海域貿易へ

十六世紀、兎にも角にもポルトガル船の種子島漂着によって、「南蛮貿易」と呼ばれる通商は行われることとなった。端緒となった鉄砲は伝来より数年で国産化されたので主たる交易品とはならなかった。ヨーロッパからは東アジア経由で生糸、絹織物、綿糸、金、麝香絹、火薬、薬、香料などが輸入され、日本からは主に銀、蒔絵、漆器、硫黄、扇子などが輸出された。

南蛮貿易と言っても、何艘もの船団がヨーロッパ諸国からやって来たのではない。大航海時代にあるヨーロッパ人も東アジアの小さな島国日本を目指してやって来た船は数隻であつたらう。狙いは大きな市場である中国、大明国であつた。ところが、当時の明国は「海禁」という政策をとっていた。いわゆる「鎖国」に近いと言つても過言ではない。倭寇の被害などに悩む明は、建国当初から朝貢貿易以外、民間の中国人が外国と交易すること、および海外に渡航することを厳禁した。これは清の時代も続いた。李氏朝鮮や日本がとつた鎖国政策も

これに倣ったと言えようが、論の手續きを要す。

そのため、ヨーロッパ、特にポルトガル人の場合、一五五七年、中国人からマカオ居住の許可を得、同地をゴア、マラッカと日本とを結ぶ定期航路の中継地および貿易拠点として発展させ、さらに一五七八年には広東市場での交易権を得て日本貿易拡大のための足固めをした(注4)。つまり、ポルトガル人は本国からの往復の船賃を抑えるために中国に中継拠点を築き、東アジア海域の産物を日本に売り、大量の銀に換え、本国に船載したのである。当然、交易が盛んになればポルトガル人だけではならず、中国、東アジア海域の人々が参入した。中国の人々にとつてこれは密貿易であるが、国内生産力が増し、特に絹織物が高価に売れ、しかも換金しやすい精度の高い日本銀が手に入るとなれば、中国各地の内陸部の商人たちは、この拠点に集結し、ポルトガル船を待たず、ジャンク船と呼ばれる東アジア海域特有の船で海路を往来した。

もちろん、ポルトガルの競争者スペインも少し遅れて日本との交易に参加するが、拠点はフィリピンのマニラにあった。やはり、途中、中国で生糸・絹織物を購入し、銀と交換し、持ち帰った。これにイギリス、オランダが更に遅れて参加することになる。

ただ、これだけの銀が日本から輸出されたことから推察すれば、十六、十七世紀の日本銀の産出量は世界屈指であつたろうが、当時の世界での銀の総産出量や石見銀山、生野銀山等国内産出量の統計資料を持たないため、これも想像の域を出ない。

ヨーロッパ・東アジア連合とも言える「南蛮人」の交易の中心となり、巨額の利を得たのが、領主を持たない自治都市、堺や博多であつた。「南蛮人」は帰国後の十七世紀初頭にヨーロッパ各国で世界地図を制作するが、その多くには、日本の地名に「堺」「博多」と彼らの言語で記している。よほど日本の交易都市として重要であつたのであろう。

だが、貿易はモノの交流だけでは終わらなかつた。海を渡つてやってきたヨーロッパ人は宣教師を始め、頗る教養人たちが多かった。それはルイス・フロイス『日本人』や『日葡辞書』の博物学的見識だけでも推察がつく。さらに彼らには日本人に広く思想、啓蒙を行える手段があつた。グーテンベルグの活版印刷機である。

キリシタン版に『平家物語』や『伊曾保物語』などがあるが、九州のキリシタン大名が派遣した所謂天正遣欧使節団が印刷機を持ち帰ったのも、宣教師たちのため以上にその文化の源に気がついたのであろう。

しかし、その間に日本では十六世紀末に織田信長が斃れ、豊臣秀吉の政権に代わっていた。キリスト教もイエズス会に加え、フランチェスコ会、後にドミニコ会宣教師たちが布教を行うが、秀吉は所謂、二度の禁教令（一五八七、一五九六年）を発動し、大名の自由な入信と大名による領民へのキリスト教入信の強制とを禁じ、宣教師の追放を命じた。

この秀吉の突然の禁教令発令にはキリシタン研究史に諸説が唱えられているが、ヨーロッパにおいて、一五八八年、スペインの無敵艦隊がイングランドの艦隊に壊滅的打撃をうけた、所謂「アルマダの海戦」の影響が大きいのではあるまいか。特に一五九七年のキリスト教信者への直接的迫害である「日本二十六聖人殉教」事件や、前年のスペイン軍船サン・フェリペ号への処遇は、強国スペイン一国によるヨーロッパ支配の均衡に翳りを読み取った秀吉の果敢な、無謀な挑発ではなかったか。

事実、秀吉が一五九一年、ゴアのポルトガル、インド副王やスペインのマニラ総督に降伏勧告状を突き付け、その後もマニラ政庁に対して降伏勧告状を送った行為は、スペイン・ポルトガル王国の軍事を軽視した故であったであろう。国書の行き違いなどで戦乱には及ばなかったが、この東アジアにおけるヨーロッパ支配力低下の徴候を確認して、明、朝鮮へと侵攻したのであろう。

その秀吉も一五九八年に没し、徳川家康が日本を治め、海外侵略を棄てた平和国家建設の礎を築くことになる。明は北方民族や日本との外患や財政窮乏、後の「清」建国につながる東北部からの侵攻などで急激に求心力を失いつつあった。ここに東アジア海域の均衡は崩れ、堺・博多はその役割を終え、南蛮貿易も終息する。

ポルトガル・スペインの日本侵略計画があったとする説があるが、ヨーロッパの宣教師たちが本国に情報を送り続けるというシステムがある以上、日本にかかわらず十六世紀東アジアに「外寇」危機があったことは確かである。ただ、スペイン王国の衰退という偶然に助けられたのかも知れない。十七世紀になり、東アジアと日本は、そのスペイン・ポルトガルに代わってイギリス・オランダ中心の外寇の危機に晒されることになるの

である。

四、朱印船貿易時代の到来

新しい「外寇」は直ぐにやって来た。秀吉が没した一五九八年、オランダのロッテルダムから司令官ヤコブ・マフの率いる六艘の東洋遠征船隊が出航した。同船隊はマジェラン海峡を通過後、嵐に遭い、散り散りとなり、一六〇〇年、「リーフデ号」だけが日本の豊後の海岸に漂着した。途中、病没した者もあり、二十数名しか生き残らなかつたが、その中に先述のアルマダの海戦を経験したイギリス人航海士ウィリアム・アダムス（一五六四〜一六二〇、後の日本名「三浦按針」）やオランダ人の商務員ヤン・ヨーステン（？〜一六二三）らが出た。「リーフデ号」生き残りの人々は大坂を経て、江戸へと向かう。そして彼らの中から、アダムスとヨーステンは家康の寵を得て、その側近に取り立てられ、世界情勢や航海法、造船法などを指教することになる。又、特にアダムスは外交顧問として日英外交、日蘭外交に尽力した。

ヨーステンは長崎と江戸に住宅を与えられ、家康の涉外関係の諮問に応じた。江戸邸の地は、その名のヤン・ヨースに因んで八重洲（やえす）河岸と呼ばれ、今日の東京駅周辺に名を残している。彼は二十余年に及ぶ日本滞在中、平戸・京都・浦賀・江戸を往復し、商業活動を続け、徳川氏の朱印状を得て、インドシナ各地、広南（クイナム）・太泥（パタニ）・東京（トンキン）・交趾（コーチ）、シヤム・カンボジアなどに持船を派遣して南海貿易にも従事した（『国史大辞典』より）。

彼らが副次的にもたらした地理学、天文学、航海学、幾何学、造船学、経済学、国際学などの知識は為政者達も傾聴した。徳川家康がヨーロッパ外交・貿易担当の側近として、アダムスやヨーステンを重用したのもそのためである。

先に黒船来航が開港を迫ったペリー艦隊を待たないとしたが、日本貿易開始のため、イギリス東インド会社艦隊司令官ジョン・セーリスがクローブ号で一六一三年に来日し、駿府、江戸で徳川家康、秀忠に拜謁し、国

王ジエームズ一世の書簡を提出し、日本から返書と通交許可である朱印状を得たことは、史上あまり騒動として語られない。大砲も揃えた軍艦が江戸湾に現れたのに「外寇」などと慌てふためいた記録も見当たらない。

これは戦乱の一六世紀を生きた人々にすれば、船は輸送船ばかりでなく、倭寇、村上水軍、九鬼水軍の鉄甲船のような軍船、ヨーロッパからの軍船、朝鮮への軍船などを見聞きして、戦乱慣れしていたという悲しい習性が染みついていたのであろう。それに対して、幕末のペリーの黒船来航は日本の「泰平の眠り」を覚ましたのであり、その平和と戦争慣れの違いかも知れない。

しかし、一方でこの時、通訳を務めたウィリアム・アダムスこと三浦按針が、大航海時代の国際法ともいべき世界外交に精通していたことがペリー来航時のような紛擾状態に発展させなかったというのも理由かも知れない。また、大航海時代を生き抜いた日本人の方が鎖国時の人々より国際人として冷静に文化交流に向き合っていた証左とも言えるし、文化形成の特有性ともいえるであろう。また、彼らの目的が「外寇」と言うよりも通商という友好性にあったことも理由であろう。

それならば、日本はどのような交易で応えたか、ということになるが、東アジアではイギリスとオランダの主導権争いが生じる。

イギリスは右のクローブ号で来日、江戸城で徳川秀忠に謁して帰洛、九月一日（英暦十月四日）に返書と通商許可の覚書を受け、これにもとづいて正式に平戸にイギリス東インド会社のイギリス商館を開設する。リチャード・コックスを商館長とし、七人の英人に加え、アダムスを雇い入れて、合計八人が、東南アジアとの往復、大坂・江戸との連絡その他の事務を分掌したが、一六二〇年にアダムスが平戸で病死した後、二三年には平戸の商館も閉鎖され、これ以後イギリスと日本の通交は途絶した（『国史大辞典』「イギリス商館」より）。

当時、イギリスとオランダはヨーロッパで国家間対立を深めており、東アジアのインドネシアにおいても香料貿易の独占をめぐる争いがあった。一六二三年、アンボイナ島にあるイギリス商館をオランダ東インド会社が襲って虐殺駆逐するという事件があった。元々、香辛料の宝庫であったインドネシアのモルッカ諸島アンボイナ島はポルトガルが貿易を独占していたが、オランダがポルトガルを追い出し、支配していたので、イギリスはこれ

を受け入れて、日本の平戸も失ったことから、東アジア交易圏から撤退し、インド貿易を本格化することになる。オランダの東インド会社はインドネシアのバタビア（ジャカルタ）にあり、香辛料貿易の主要中継地になるとともに、東アジア貿易の中心地となった。オランダは東アジア貿易を独占するため、日本・台湾・インドシナ半島等商館を次々と築くが、日本商館は、貿易に欠かせない金・銀・銅の補給地として重要な役割を持つようになった。

徳川家もオランダを東アジア海域の覇権を握った国として重視し、キリシタン活動もしないことから、次第にヨーロッパ随一の国として重視し、鎖国下でも海外通商の窓口として扱った。

徳川時代に先立つ十六世紀末の秀吉時代、日本は莫大な量の金・銀・銅が産出され、全国各地から天下人のもとに集まり集積されていた。秀吉は海外交易がもたらす経済効果に目を付けたが、南蛮貿易では堺・博多の商人たちに富を独占されていた。そこで朱印船貿易が開始される。先述した明の「海禁」制度や朝鮮での対立もあり、中国との貿易を憚り、台湾・交趾（コーチ）・暹羅（シャム）、また、マニラのスペインとの衝突を避け、呂宋（ルソン）にも進出し、同地に來航する中国の密貿易船と出合取引をするようになった。そのためには海賊船ではない、日本船であることが商取引の信用となり、秀吉政権の証明書として朱印状を与えて通商させた。

秀吉没後、実質的に政権を掌握した徳川家康も海外貿易による経済効果を知り尽くし、できる限り堺・博多商人を排除し、新たに京都の角倉了以父子・茶屋四郎次郎、大坂の末吉孫左衛門、長崎の末次平蔵・荒木宗太郎らを加え、同じく朱印状を与え南海交易に従事させるなどして朱印船貿易を確立した。『国史大辞典』によれば、

寛永年間（一六二四～四四）の半ばごろの鎖国政策断行に至るまで三十余年間に朱印状の下付を受けて航海したわが商船は非常に多く、創設後元和二年（一六一六）に至る十三年間は、朱印状の原簿ともいふべき『異国御朱印帳』および『異国渡海御朱印帳』によって集計し、その脱漏を現存朱印状および諸記録によつて補えば合計百九十五隻となる。爾後、鎖国に至るまでを内外の記録によつて蒐集統計すれば、

百六十一隻となるから、創設以来鎖国までの累計は、少なくとも三百五十六隻となる。朱印船の渡航先は、中国南部の港湾からインドシナ半島各地、ならびに南洋諸島など十九地に跨り、ほとんど赤道以北の南方各地の主要な港津を網羅していた。

とあるが、十七世紀前半、鎖国に至るまで、東アジアの小さな島国日本にしては、いかに多くの船が南海航路を往来していたかがわかる。当然、個々の日本人も海外事情には通じ、広い世界地図に自己を置く国際認識は、十八、十九世紀の江戸時代の人々とは比べるべくもない高次なものであったことは確かである。

五、終わりに代えて

十六世紀にヨーロッパ文化に接した日本人の驚きは、鉄砲一つでもわかるように衝撃的であつたらう。今に残るポルトガル語等外来語も多い。隠れキリシタンが信仰に生き続けられたのも遠い彼の地に幾多の優れた文化と共に住む同胞があることを信じてであつたらう。ヨーロッパ文化は大海原の向こうにある。いつか辿り着きたいと憧れつつも日本は戦国時代。文化昂揚は二の次であつた。

しかし、十七世紀になると戦乱の世が終わり、陸には五街道、海には廻船航路が整つたことで国内の物の移動が安定した。インフラの整備は経済の活性化につながる。国が経済的に豊かになると個人も潤う。個人が富めば衣食住の生活にゆとりが出来る。ゆとりは贅沢となり娯楽を育む。娯楽こそあらゆる文化形成の礎となつていったのである。

右の簡単な流れ図が出来上がったのは、米の廻米制度や公共事業などの内需拡大に加え、最も重要な位置を占めたのが朱印船などの東アジア海外貿易による景気底上げ効果であつた。海外取引に必要な金・銀・銅はまだまだ産出してた。この経済の爆発的なエネルギーが四民の意識を押し上げ、十七世紀末に元禄文化として作興する原動力となつたのである。

ところが政治的な理由から十七世紀中頃に「鎖国」政策がとられた。今日、江戸時代の交易が蝦夷、対馬、

琉球、長崎が世界に向けて残されていたことを思うと「鎖国」という語が日本の外交政策として正しいかどうか疑問視される(注5)。然りながら、海外渡航の禁止政策が徹底したことは大きく、日本から世界への門扉は閉ざされ、見渡す限りの大海原は単なる景物となつてしまった。

これにより少なくとも優れた造船技術や遠洋航海術、渡航経路の記録は失われたであろう。中国明代、鄭和の死とともに忘却された大航海の遺業同様、日本の海原に遠洋航海用の大型船が、精々、千石船になったとき、妙妙たる我が国の海洋学の継承が消え去つた。

海外との折衝の機会が失われたことは、国際法とも言うべき世界認識がなくなった。それは国防意識も含むが何よりも外国語、多言語を理解する力が衰えたことは大きかつたであろう。

キリスト教という世界思想を隔離したことも大きかつた。特にグローバル化を唱える今日の日本において、外国語能力の陶冶という技術鼓吹の裏に、遅れた異文化理解として影を落としている。そうなると十七世紀の日本文化形成はヨーロッパの海外思想と隔絶したことで、停留したかと言うと、むしろ、否である。

その思想形成の礎は東アジアの人々に学ぶことで得られた。例えば、ベトナムなどの海外交易で活躍した体験を持ちながら水戸光圀に仕えた朱舜水、藤原惺窩の師であつた朝鮮の姜沆(きょうこう)のような儒教家や黄檗宗の隠元隆琦のような仏教家の存在である。彼らの世界市民意識が幕末のような尊皇攘夷を国是とせず、柔軟な思想形成を行つていくことにつながつたのである。

また、技術面においては出版技術の飛躍があつた。そこには十六世紀のキリシタン版の活版印刷の存在が指摘できる。十七世紀にかけて朝鮮版、駿河版、木活字版などが工夫されつつも、木材を利用した安価な整版本印刷の技術として実を結んだ。この大量印刷の時代は書写時代には見られない古典啓蒙の時代を惹起した。教養としての読者は定着し、不特定多数の教養ある読者に向かつて作品を創作するという作家と読者の新しい機軸を産みだしたのである(注6)。加えて貸本屋制度によつて、読者層を拡げたのもグーテンベルグの印刷機による大衆教化というヨーロッパ文化に刺激を受けたからであつたかも知れない。

尚々、十七世紀の文学は日本独自に形成されながらも長崎に船載される中国文学からの影響を大なり小なり受けている。これは海港独特の文化発信力(注7)に拠るところが大きいと評価できるであろう。ただ、十七世紀以降の日本文学には、それまでの長い中国文学を範とした受容史とは違った、何らかの変化を感じずにはいられない。その源を十六世紀に南蛮からの黒船来航を迎えた異文化受容方法の変化に認めるのであるが、これには更なる手続きが余儀なくされるとして論を終わりたい。

注

- (1) 外山卯三郎『南蛮船貿易史』(東光出版)一九四三年刊、岡本良知『十六世紀』日欧交通史の研究(六甲書房)一九四二年刊を参考にした。
- (2) 前編第一章「南蛮という語句について」『キリシタン研究第二部論攷篇』(風間書房)一九七五年刊。
- (3) 松田毅一注(2)に同じ。
- (4) 箭内健次「南蛮貿易」(『岩波講座』日本歴史)九一九六三年刊所収、山脇悌二郎「近世の対外関係」(『体系日本史叢書』(山川出版社)五)一九七八年刊所収を参考にした。
- (5) 拙稿「鎖国下日本と世界に繋がる海の交易ルート―西鶴文学を視座として―」『人文論究』(関西学院大学人文学会)第六十七巻第四号 二〇一八年二月刊所収。
- (6) 拙稿「古典文学における「物語」と「読者」―書写・印刷史を視座として―」『文学・語学』(全国大学国語国文学会)第二二五号 二〇一九年十一月刊所収。
- (7) 静永健「海港がはこぶ新しい文学―中国古典文学と九州―」若木太一編『長崎東西文化交渉史の舞台』(勉誠出版)二〇一三年刊所収。

(もりた・まさや／関西学院大学文学部教授)